教養教育センター　マンスリーコラム　vol. 45
2026 / 10 / 16



私の『ボランティア元年』は…

鈴木　浩司（植物分類学）

1995 年は『ボランティア元年』と呼ばれています。その理由は、この年の 1 月 17 日に起こった阪神・淡路大震災において、それまでボランティア活動に関心が薄かった多くの一般市民（1 年間で延べ 130 万人以上とも言われる）が被災地に出向き、様々な支援活動を行なったことにより、世間一般に「（災害）ボランティア」という言葉が定着するようになったからと言われています。当時、京都（震度 5）で大学院生だった私は気持ち的にはボランティア活動をしたかったが、結局何もできずにいました（まぁ勇気がなかっただけですが…）。

それから約 30 年の月日が流れ、富山に来て 7 年目の冬、2024 年 1 月 1 日に能登半島を大きな地震が襲い、富山県内でも西部を中心に多くの被害をもたらしました。さらに追い打ちをかけるようにその年の 9 月には能登半島を豪雨が襲い、多くの家屋や田畑に濁流が流れ込みました。そして今年（2026 年）8 月には氷見市を中心に豪雨が襲い、2 年前の能登半島と同様に濁流が町を飲み込みました。

さて、タイトルにある私の『（災害）ボランティア元年』ですが、能登半島地震が起こった 2024 年の 1 月に私が住んでいる射水市（震度 5 強）の社協（ボランティアセンター）が募集した災害ボランティアに参加したのが初めてでした。具体的には海に近い新湊地区で起こった液状化により噴出した土砂の撤去作業でした。より被害の大きい能登半島にも行かねばと思っていましたが、道路状況（能越道やのと里山海道）が悪くなかなか踏み出せませんでしたが、そうこうしているうちに 9 月の豪雨災害が起きました。それからは知り合いの誘いもあり能登半島での災害ボランティアに 10 月から翌年の 6 月まで月に一回程度、計 8 回参加しました（輪島市、珠洲市、能登町、七尾市）。希望した学生を連れて行ったこともありました。現地では地震と豪雨の凄まじさを目の当たりにしながら、家屋に流入した泥を搬出するというものがほとんどでした。全国各地から多くの老若男女が集まり、現地ボランティアセンターの采配の元、チームを組んで、これも全国各地から集まった軽トラに一輪車やスコップ等を積んで依頼のあった住宅等に向かい作業しました。しかし、2025 年も後半になるとボランティア募集も少なくなり、自然と能登半島から足が遠のいていきました（重機による公費解体が本格化した）。

そのころ、氷見市において公費解体前の家財を搬出するボランティア募集があり、今度はこちらに通うようになりました。能登と比べたら特に被害を感じない家屋が多いのですが、中に入ると柱が傾き、壁にもヒビが入っている状況でした。昔からある大きな民家では壊れかけた土蔵の内部から大量の椀や膳を運び出しました。昔はこの大広間にみんなが集まって冠婚葬祭をしていたのだろうなぁと勝手に想像しつつ、トラックに投げるように積んでいきました。また、かつて商店だったと思われる細長い民家では、おそらく呉服店だったようで大量の反物をこれまたトラックに投げ込みました。それから 1 年後の今年の夏、この元呉服店があった通りを歩いたのですが、あたり一面更地になっていて、正直この場所で合っているのかどうかすら分からなくなりました。地震や豪雨災害が物だけでなく、人々の営みやその記憶すら消し去っていくものだと実感し、一体何をもって復興と言うのか、改めて考えさせられました。






止ま

